

第 1 日 第一会場 12 月 2 日 (土) 14:00-14:40

池上 彰 (広島大学大学院生)

### 海事英語辞書における語義の記述に関する一考察

ここでは筆者が理想とする海事英語辞書の製作について考える。既存の海事英語辞書の問題点は、英単語とその意味だけが列挙されている単語帳のような感覚のものであることだ。従って、読んでイメージすることにより学習・理解することは、困難であると考えられる。意味同士が比喩的な繋がりを持った辞書が海事英語という特異な世界にも新風を吹き込むことが可能である。実際に、この発表では海事英単語 anchor (名詞) と bear (動詞) をとりあげて、海事英語辞書のサンプルを紹介しながら進める。筆者が製作を目指す海事英語辞書は、認知言語学とコーパス言語学の両方を採り入れたものにする。

まずは、語義 (語の意味) について触れておく。複数の語義を持つ単語を多義語という。そのことを考えると、辞書製作の際には、認知言語学の中の学際領域である多義語研究の知見を取り入れて、語義の配列を行っていくことが適切であると考えた。最も頻度が高い中心義 (中心的な意味) は、周辺義へと比喩的に意味拡張される。その周辺義はメタファー (隠喩)、メトニミー (換喩) そしてシネクドキ (提喩) と呼ばれるものである。

メタファーは、あるものごとの名称を、それと似ている別のものごとをあらわすために流用する表現法であり、「類似性」が鍵になる。次のメトニミーは、あるひとつの現実 A をあらわす語のかわりに、別の現実 B をあらわす語で代用する比喩であり、その代用法は、事実上または思考内で A と B を結びつけている隣接性に基づくものである。最後のメトニミーは、より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩である。これは、包摂性に基づいて意味が拡張する。この比喩の要素を海事英語辞書に反映させたい。

次に、コーパスについて触れておく。日本人母語話者にとって、利便性に応えてくれる英語辞書の存在は大変貴重なものだ。辞書を使う目的は人それぞれである。見出し語や語義の配列はもちろんのこと、発音や類義語に加えて、詳しい文法事項も利用者にとって有り難い存在だ。コーパスを使つての英語辞書編集は、近年一般的になってきた。コーパスからの言語情報を全面的に採り入れた英語辞典が『ウィズダム英和辞典』である。コーパスの観点は、「言語研究を目的として、書き言葉や話し言葉などの現実を反映した英語を大規模に、基準に沿って網羅的・代表的に収集して、コンピュータ上で処理できるデータとして保存できる」ことである。つまり、コーパスを使用することで、得られる情報が明確になるのである。

以上、述べてきたことから、多義性とコーパスからの知見を採り入れることで、利用者に学習の質を担保する海事英語辞書の製作を目指していきたい。

第 1 日 第一会場 12 月 2 日 (土) 14:45-15:25

村松 直子 (清泉女学院大学)

## 文学系授業が英語コミュニケーション能力育成に果たす役割 — 「原典講読」授業の談話分析を通して—

国際化が進む社会状況を反映して、英語のオーラル・コミュニケーション能力育成を重視する日本の学校英語教育方針が打ち出されてから 20 年が経過している。2002 年 7 月、文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想—英語力・国語力増進プラン」(以下「戦略構想」とする)を発表した。翌 3 月には、「戦略構想」に具体的計画を加筆した「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(以下「行動計画」とする)が策定された。「行動計画」では、「子どもたちが 21 世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠」であるが、「現状では、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態も生じている」ことから、「国民全体に求められる英語力」として「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる(卒業者の平均が英検準 2 級～2 級程度)」、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことを英語教育の到達目標とすることが述べられている。具体策として「英語の授業の大半は英語を用いて行い、生徒や学生が英語でコミュニケーションを行う活動を多く取り入れる」ことや「少人数指導や習熟度別指導などを積極的に取り入れる」ことなどが掲げられ、2002 年から小学校の総合的な学習の時間に「国際理解」や「外国語活動」が導入されるなど、イメージ教育に近づくことによりオーラル・コミュニケーション能力を育成しようとする強い姿勢が伺われる。同教育指針を受けて、英語教育のなかで文学テキストを扱う事例が減少したと言われている。このような動きを受けて、文学系授業が英語教育にどのように貢献し得るかという主題をめぐり、英語文学研究者を中心に活発な議論がなされてきた(斎藤、2004; 江利川、2008; 土屋・伊澤、2015; 高橋、2020; 西山、2022)。2004 年 10 月に発刊された『英語青年』増刊号では「特集 1 英語教育に文学を！」が組まれた。日本英文学会では、2003 年大会の特別シンポジウムで上記の主題が取り上げられ、翌年の大会からたびたび同主題に関する発表がされるようになり、2017 年には同学会関東支部編纂で『教室の英文学』(帯のタイトルは「英語と文学をちゃんと教えます!」)が刊行されている。他の学会や研究論文においても同主題をめぐり議論や研究は継続されている。本研究では、上記の先行研究を踏まえて、先行研究では殆ど実施されていない授業内発話を談話分析する手法により、「原典講読」や「英語文学」等の英語文学系授業が学生の英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解にどのような役割を果たしているか、調査分析結果に基づいて考察する。談話分析には、フレームやフットィングといった Goffman (1981)の相互行為の社会言語学の枠組みを用いる。そして、学生同士あるいは教師との関係性のなかで、学生たちが実際にどのようにテキストに向き合い、クラス内コミュニケーションに参加し、いかなる学びを得ているのか、個々の発話や相互行為としての会話を子細に分析して考察する。

## 戦時下アメリカの教育と英語表現

1941 年 4 月、日本政府は国民学校令を発令し、総力戦体制を強化するために教育を全面的に統制しはじめる。同年 12 月、アメリカとの戦争がはじまると、日本の教育は「皇国民錬成」のスローガンのもと、戦争に勝つことだけを到達目標とみなし、とりわけ初等科で使用される教科書に、国家主義的で軍国主義的な内容の教材をふんだんに盛り込み、児童・生徒たちの戦意を高ぶらせた。敗戦後、アメリカ軍によってそのような戦時下の教育が問題視され、文部省は教育改革、とくに教科書の削除修正をめぐる対応に追われる。もちろん、こういった点に言及している先行研究は各市町村の教育史や郷土資料なども含めると枚挙に遑がないので、これ以上付け足すことはあまりないように思われる。しかし裏を返して言うなら、先行研究が豊富にあるからこそ見えてくる問題点というものもある。

例えば、戦時下日本の教育に関する文献は豊富にあるが、そういった議論と並行するかたちで戦時下アメリカの教育を検証する研究が出てこないのはなぜなのか。政府が国民に総力戦体制を強いたのは日本もアメリカも同じである。国家主義や軍国主義が主調となっている教科書を使用していたことも共通するし、国家主導のもとで学徒動員を組織的行なったことも共通する。そうであるにもかかわらず、日本の学的領域からそのところを検証する論考が見えてこないのはなぜなのか。発表者の調査能力が不足しているということもあるが、問題は他にもあるはずだ。戦時下アメリカの教育に目を向けることで、戦時下日本の教育に対する批判が相対化させてしまい、場合によっては国家主義や軍国主義を寛容することになりかねないとの判断がブレーキをかけている可能性も否めないだろう。言うまでもないことだが、本研究報告は戦時下アメリカの教育に着目するものではあるが、それによって戦時下日本における文部省の教育政策を相対的に寛容しようとするような立場には与しない。むしろ戦争と教育は必然的に共犯関係に陥るということを示すものである。また、戦時下アメリカの教育に関する論考が少ない理由として、一次資料や参考文献の希少性を挙げることできるだろう。日本は敗戦国として戦後に教育改革を強いられた。以来、軍国主義と教育の共犯関係というテーマが繰り返し問題化されてきた。一方、戦勝国の教育についてはどうか。戦時下における「民主主義国家アメリカ」の教育事情に批判的に斬り込む研究がこれまで継続的になされてきたと言えるだけの判断材料は寡聞にしてまだ見つからない。とはいえ先行研究がないわけではない。なかでも Gerard Giordano, *Wartime Schools* (Peter Lang, 2004) は網羅的な研究として際立っている。本研究報告では、ジョルダノの論考に依拠しながら、入手可能な一次資料 (*Handbook on Education and the War, Education for Victory, Frontier of Democracy* といった内務省教育局の支援を受けて発行された雑誌や冊子) や *The English Journal* に見られる教育論などに着目し、戦時下アメリカの教育の実情を部分的にはあるが明らかにする。その際とくに注目したいのが戦時下アメリカにおける英語教員の役割であり、かれらが打ちだした「英語表現」のあり方である。

第 1 日 第二会場 12 月 2 日 (土) 14:00–14:40

城山 友孝 (名古屋大学)

## The value of Non-Native English Teachers

The number of Non-Native English Speakers (NNES) has been increasing these days. Samida (2010, p. 25) argues that nearly 400 million people speak English as their first language, while over 400 million people speak English as their second language and about 800 million people use English as a foreign language. The number of non-native speakers of English around the world is far larger than native speakers. Also, this situation applies for English class settings. Most English teachers are non-native teachers around the world. However, Cheuing (2010) points that these non-native teachers are not dealt with equally as native-speaking teachers. Ulate (2012, p. 69) states that 50 percent of the NNES teachers who responded to the researcher's questionnaire answered that they were discriminated when they applied for job. Because they were not Native-English speakers (NES). This issue is frequently associated with the "NES fallacy". Maum (<https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED470982.pdf>) argues that the term of the 'NES fallacy' was created as "a reaction to tenet created at the 1961 Commonwealth Conference on the Teaching of English as a Second Language in Makerere, Uganda, which stated that the ideal teacher of English is a native speaker". Are NNES teacher's inferior to NES teachers? When we think about the fact that most of English educators in the world are NNES educators, it is fairly important to discuss their role and status.

A number of studies have been carried out on NNES teachers, and one of them is Seidlhofer's research (1999). This researcher explored the position and the role of NNES educators, carrying out empirical research in Austria. Seidlhofer argues that NNES educators are suited to teach English, because they can understand the target language and distance from it at same time. Is this researcher's conclusion valid? For her statement, I will critically analyze the arguments discussed by Seidlhofer (1999) on the status and role of non-native speaker teachers in English language teaching. I will first define non-native English teachers. Then I will evaluate four of the Seidlhofer's arguments one by one: non-native English teachers can contribute to English language teaching by (1) being "double agents", (2) handling "double talk", (3) engaging in "double think" and (4) by living "double lives". Then I will look at her arguments from students' perceptions. Finally, I will give an overall evaluation of Seidlhofer's arguments and give my own views.

第 1 日 第二会場 12 月 2 日 (土) 14:45-15:25

宮崎 啓 (東海大学)

### 英語教職科目に対するステークホルダー意識調査

本発表は英語教職課程履修大学生、英語教職担当教員、そして中等教育の現職英語教員の外国語としての英語(English as a Foreign Language: EFL)の指導に関して、教員が習得すべき知識やスキルの共通理解およびギャップを一部報告する。日本の EFL 教員に求められる能力は、その教科の語学スキルを身につけることだけではなく、教育方法論、クラス運営、評価方法など、EFL 教員になるために必要な専門知識やスキルも必要となる (Freeman, et al., 2009)。そのため、EFL 教員教育で広く使われている教科書には、ESL/EFL の問題、学習指導要領、言語学習に影響を与える要因、教授法、SLA 理論、テスト、技能習得など、さまざまなトピックが含まれている (Ellis, 2009; Mochizuki, 2020)。すべてのトピックが EFL 教員や学習者に等しく関連するわけではないが、日本の大学で開講される教員養成コースの基本的な内容とトピックは総じて類似したものと言える。

しかし、現実には、教員養成カリキュラムの限られた枠の中で、すべてのトピックを網羅することは困難であり、また、現職教員にとっても、教育学的な問題を実習での実践と結びつけることは困難である (McLean, et al., 2013) そのため、多くの教職履修者や現場教員は、教員養成プログラムの中で教育学的知識を学ぶよりも、英語力を高めたり現場の情報を得ることに時間を費やすべきだと考える傾向がある (Hatasa, 2013)。さらに、関係者、特に中等教育現職教員と大学の教職担当教員が接触する機会が少ないため、理論と実践が食い違うという課題もある (伊東&宮崎, 2016)。

このような状況を踏まえ、本発表では、日本の英語教員養成課程の現状を教職履修大学生の視点を中心に考察し、さらに英語教職担当教員、そして中等教育の現職英語教員という 3 つのステークホルダーの視点からの意識を調査し、共通意識とギャップを探索する。2 つの大学で英語教職科目を受講した 53 名の EFL 教職履修者を対象に、コースで扱ったトピックについてのどの程度理解しているか、また、そのトピックが将来の実習にどの程度有効で役に立つかを尋ねるアンケートを実施した。さらに、2 名の教職履修者に半構造化インタビューを行い、教員養成コースのトピックに対する意識を深掘りして調査した。また、すでに実習を経験した教職履修者 1 名、実習生を担当した現職教員 1 名、英語教授法の講義を担当する大学教員 1 名にもインタビューを行い、異なる立場から教員養成で扱うトピックへの意識を分析した。

その結果、SLA 理論、学習指導要領、日本の英語教育史、テストと評価といったトピックは、教職履修者にはあまり注視されていないことがわかり、また、インタビューから、教職履修者の不安と現職教員の期待にはギャップがあることが明らかになった。また、大学における教員養成課程では、その専門性や意識に関して、当事者間の共通理解が希薄であるという事実も示唆する。

なお、本発表の調査は、研究途中段階での中間報告となり、更なる被験者への調査が必要であるが、現状把握と問題提起を目的とした探索的研究の類として発表する。

第 1 日 第二会場 12 月 2 日 (土) 15:30-16:10

石濱 博之 (宮崎国際大学)

### 外国語教科化に因る聴解力への効果の比較・検証

2017 年 3 月に現行小学校学習指導要領が告示されて、2020 年 4 月から小学校高学年では外国語が教科として導入されて成績評価もされている。そして、小学校中学年では外国語活動が必修化されている。

そこで、(1) 口頭発表のねらいは、1. 2018 年度に実施した中学校入門期における学習者の聴解力(「聞くこと」と 2023 年度に実施した中学校入門期における学習者の聴解力(「聞くこと」)について比較検討することにある。2. 観点別評価の中でどのような観点が中学校入門期の学習者に容易であり、あるいは困難であるかについて検証することにある。

(2) 調査方法： 1) 以前に作成した『中学校入門期用聴解力テスト(『Hi, friends! 1・2』聴解力テスト統合型)(石濱・渡邊, 2017)を使用した。その聴解力テストの内容は、問題 1 (10 問) 正しい文字の認識、問題 2 (10 問) 英語の単語を聞いて、その意味を正しく連想したり、日本語を正しく認識できるか、問題 3 (8 問) 2 人の短い会話を聞いて内容が理解できるか、問題 4 (4 問) やや長い対話を聞いて、その内容が理解できるか、問題 5 (3 問) 長い会話を聞いて、内容が理解できるか、で構成されている。2) 調査実施日は、2018 年 4 月と 2023 年 5 月であった。3) それぞれの学習者は、H 県 A 市の中学校 1 年生であった。4) 2018 年 4 月の参加者は 218 名であり、2023 年 5 月の参加者は 41 名であった。5) 処理方法は、独立した  $t$  検定を用いた。6) 情意面、及び「自由記述」の項目についても調査した。

(3) 調査結果： 2018 年 4 月の参加者(学習者：前の小学校学習指導要領で外国語活動をした)と 2023 年 5 月の参加者(学習者：現行の小学校学習指導要領で外国語を学習した)の間で、聴解力テストの総計の平均点はそれぞれ 25.71 ( $SD=3.98$ ) と 26.39 ( $SD=3.97$ ) であった。 $t$  検定の結果 ( $t(257) = -1.00, p = .32, d = -.17, 95\%CI[-2.01, .65]$ ) では、有意差はなかった。2018 年 4 月の聴解力(「聞くこと」と 2023 年 5 月の聴解力(「聞くこと」)の結果はほぼ同じであるといえる。下位項目である問題 1 から問題 5 までの  $t$  検定の結果も、総計と同様の結果であった。現行の小学校学習指導要領において、小学校高学年で外国語(英語)が教科として導入したにもかかわらず、その効果はまだ現れてないかもしれない。聴解力(「聞くこと」)が向上するには時間を要するかもしれないし、その指導方法が開発中であるかもしれない。年度の比較に因る、詳細な問題ごとの結果(特徴)は口頭発表で示す。

第 1 日 第三会場 12 月 2 日 (土) 14:00-14:40

畠田 佳奈 (都留文科大学大学院生)

### バーン=ジョーンズの The Flower Book における独自性

エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ (Edward Coley Burne-Jones, 1833-1898) は、絵画だけでなく、ステンドグラスの下絵、家具の絵付け、本の挿絵、タイルやタペストリー のデザインなど多岐にわたる作品を世に送り出し、今もなお人々を魅了している。彼は、ラファエル前派のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのもとに弟子入りをし、ウィリアム・モリスや他の仲間たちと切磋琢磨して芸術表現を磨き上げた。4 度のイタリア旅行 (1859 年、1862 年、1871 年、1873 年) などの異文化体験は、彼の作風 (色彩、構図、肉体表現など) にも変化を及ぼし、実際にイタリア帰国後には主要な作品をいくつも完成させている。イタリア美術の影響を受け、小型のものから大型の構図にも興味を持ち始め、制作にも多くの時間をかけ、中には未完の作品も少なくない。

多くの大型の作品を掛け持ちしていた 1880 年代前半から彼が亡くなる 1898 年まで、余暇 を用いて不定期に制作していたとされるのが、直径 15.24 cm ほどの小さな円形の素描シリーズである。この素描シリーズは、総数 38 点にも及び、画家の死後、複製版が The Flower Book としてまとめられ、妻のジョージアナによって、ファイン・アート・ソサエティのもと出版された。この素描シリーズは、誰かに制作を依頼されて取り掛かった作品ではないことから、彼自身が自らの喜びとして描いたものであり、彼自身が描きたい表現が用いられていると思われる。実際に、妻ジョージアナも素描の表現を高く評価していて、“both colour and design are always perfectly clear, and are so intimately characteristic of the painter that I have sometimes thought this book contains a fuller expression of himself than exists elsewhere in his work”<sup>1</sup> と述べている。The Flower Book の素描は、画家独自のこだわりが詰まっていることが作品からも見て取れるが、本作品だけに注目した研究は多くはない。

本発表では、この素描シリーズについての考察を行い、作品の独自性や、彼にとっての重要な作品であったことを再確認したい。具体的には、以下の内容を踏まえて発表したい。

1. バーン=ジョーンズの後年の作風について
2. The Flower Book の作品の特徴や、作品に対する批評家の反応について
3. The Flower Book と画家の過去の作品との類似点、相違点について
4. The Flower Book が画家にとってどのような位置づけであったかについて
5. まとめ

第 1 日 第三会場 12 月 2 日 (土) 14:45-15:25

杉田 貴瑞 (香川大学)

### 悪漢の造形に見る明治期ディケンズ翻案再考

本発表では、Charles Dickens の小説 *Oliver Twist*(1838-40)の明治期日本における受容の一側面を翻案作品との関係から考察する。明治 20 年あたりから日本において Dickens の翻訳・翻案物が出版されるようになったが、そのほとんどが *Sketches by Boz*をはじめとする短編作品や長編小説の一部抄訳であった。明治期の日本における翻訳は、舞台を日本に移し替える翻案も多かったが、ディケンズ作品は *A Christmas Carol*の翻案『影法師』など一部を除いて、原作をなるべく忠実に日本語へと移植する翻訳も多い。その中で明治 44 年に新聞連載された『小桜新八』は、珍しく長編小説である *Oliver Twist*全体を底本とした翻案物である。この『小桜新八』を主に取り上げ、その中に登場する悪漢の造形を原作と比較して考察する。

『小桜新八』は明治 44 年に都新聞に連載されたのち、翌年に『小桜新吉』という題名で単行本としても出版された。すでに翻案よりも翻訳が主流になりつつあった明治末期において、原作を換骨奪胎して、登場人物や地名はすべて和名、舞台も明確な設定こそないものの明治日本へと移されている。訳文の調子も明治 20 年代の書生小説に近く、同時代の翻訳と較べると古めかしく感じるほどである。これらの改変のために、『小桜新八』については、ディケンズの一翻案作品という程度の認識しかなく、具体的なテキストの異動についての研究などはほとんど行われていない。

一方で、翻案者の堺利彦は社会主義者でもあり、原作者ディケンズが貧民に寄せた同情に共感したとも述べている。そのため、とりわけ原作の前半に見られる大きな特徴の救貧法をはじめとしたヴィクトリア朝都市部特有の社会問題を「養育院」と大きく改変する形ではありつつも、取り扱っている。しかし、さらに注目すべき点は、原作で主人公の Oliver よりも強烈な印象を与える悪漢たちの造形の変化である。とりわけ Fagin に関しては、作品末尾に独房で死刑への恐怖に震える場面が無くなるなど、その人物像が大きく変化している。悪漢たちの中心である Fagin の変質は、当然物語全体への影響を及ぼしているはずである。したがって本発表では、Fagin の変化を原作と翻案を見比べることによって検討する。それによって当時すでに欧米の研究においても賛否のあったディケンズの戯画化された悪漢像が、どのように翻案され日本において受容されたのかを明らかにしたい。



第 1 日 第三会場 12 月 2 日 (土) 15:30-16:10

梅宮 悠 (成蹊大学)

### フォルスタッフが体現する騎士の理想と現実

16 世紀から 17 世紀にかけて活躍した劇作家ウィリアム・シェイクスピアは現存するおよそ 40 篇の戯曲の中で、「歴史劇」に分類されるものを 11 篇手がけている。英国史の時系列で言うと 12-13 世紀の『ジョン王』の物語から始まり、当代女王エリザベス 1 世の父にあたる『ヘンリー 8 世』に至るまでの複数名の王族の人生の断片が舞台上で表現されてきた。

当時の検閲の実態を確認すると、宗教的に危険な内容はもちろんのこと、存命中の王侯貴族の扱いは細心の注意が払われていた。もちろん、例外的な事例や抜け道は散見するが、「歴史劇」を網羅的に外観すれば、幾多の登場人物の中でも異彩な存在感を放つキャラクターに行き着くことができる。その人物はシェイクスピアの全戯曲の中でも特段の認知度を誇るハムレットや、「歴史劇」の中にあっても膨大な台詞量を担うリチャード 3 世よりもシェイクスピア本人の、または当時の観客の注意を惹きつけていたことになる。それが喜劇的なキャラクターとして知られる老騎士、フォルスタッフである。

フォルスタッフは一つの戯曲に留まらず、4 つの作中に登場する。『ヘンリー 4 世 第一部』では次期王としての品格がまだ備わっていないハル王子に悪影響を与え、『ヘンリー 4 世 第二部』では徐々に切り離されていく哀れな人物として扱われ、『ヘンリー 5 世』では言及されるに留まるが、新王ヘンリー 5 世との断絶によって心が打ち砕かれた状況が語られる。2 人の関係性から、ハル王子の成長を見出すこともできるが、同時に新しい時代に向けて変わっていく若者と、古い習慣から抜け出せない老騎士の姿を読み取ることも可能だろう。また、そのような人物が表現する騎士として望ましくない側面だからこそ、当時の理想と現実を教えてくれるのかもしれない。

本発表では、理想的な騎士からの乖離を切り口に、「歴史劇」3 作品に加えて、「喜劇」に分類される『ウィンザーの陽気な女房たち』の中でフォルスタッフがどのように表現され、彼がどのような人生観を語っているか検討したい。それが当時の観客たちに受け入れられたという事実を鑑みれば、歴史として認識されている騎士たちの姿と現実の不一致が認められるかもしれない。そうした期待のもとに作品の精読を行い、その成果を発表したい。

第 2 日 第一会場 12 月 3 日 (日) 10:00-10:40

坂本 輝世 (滋賀県立大学)

### 英詩を書く－英語で表現する経験が意味するもの

授業の中で「英語で書く」という表現活動は、学習者自身にどんな意味を持っているのだろうか。本研究は、「英詩を読み、自分でも書いてみる」という活動における、学習者の「経験」を記述、分析して深く理解すること(玉井、2016)を目的とした実践研究である。機械翻訳や生成型 AI の登場により、誰もが容易に日本語の「情報」を英語にできるようになった。そのような状況下でも、学習者が自分で英語を書きたいと願い、書くことに喜びを感じることはありうるだろうか。これからの英語ライティング教育を再考する上でも、学習者にとって「英語で書く」経験が持つ意味を理解することが必要となるだろう。

本研究では、Koch (1973) の実践をヒントに、Robert Frost の “The Pasture” を読んで詩を書くという教室内活動を行なった。“The Pasture” は二つの四行連から成り、湧き水の手入れや生まれたばかりの子牛の世話を放牧地へ行く語り手 “I” が、そこで見られるだろう情景を描写しつつ、“I sha'n't be gone long.—You come too.” と締めくくる。まず、この詩の語り手 “I” と、呼びかけられている “You” のイメージ(外観、年齢、性別、雰囲気など)を各自で書き、グループ内で比較してもらうことで、詩から受け取るものが一人一人異なる(異なってよい)ことを実感してもらった。次にこの詩を雛形として自分で英詩を書いてもらったが、1) 自分が大切な人を誘って行きたい場所、または大切な人に誘ってもらえたら嬉しい場所を考えて、読む人に伝わりやすく英語で描写する、2) 四行の連で書く(連の数は任意)、3) 少なくとも一つの連の最後は “I sha'n't be gone long.—You come too.” とする、の 3 点を条件とした。そして、詩を書いてみて感じたこと、他の人の詩を読んで思ったこと、他の人からの感想を読んで感じたことも、そのつど書いてもらった。

これらの学生が語る「経験」を、オープンコーディング(サトウ他、2019)で質的に分析した。またその解釈に際しては、補助的な枠組みとして主に、van Lier (1996) の提唱する言語教育カリキュラム 3 原則、1) awareness (言語知識の理解だけでなく、自分が何のために言語を使っているのかという理解に基づいて活動できていること)、2) autonomy (押しつけられた活動ではなく自分で選択する余地があり、そのことが学習へのモチベーションと自己調整につながること)、3) authenticity (言語を使うための理由や意図が学習者に感じられ、そのことで学習へのコミットメントが生まれること)を用いた。

英詩を書く活動は、「誰が読んでも正確に意味が通じる」ことを目指すライティング指導からすれば優先順位が低いだろう。だが、Hanauer (2012) や Hawkins & Certo (2014) らが論じるように、詩には「自分にしか書けないこと」が書ける。学習者の書いた詩の英語表現や、かれらの語る「経験」の分析を通して、それが母語であれ外国語であれ、人が「書く」ことの意味について考えてみたい。

### 機械翻訳の使用が学習認知プロセスに与える影響に関する予備的考察

2010 年代に人工知能が搭載されて以来、機械翻訳の性能の向上が著しい。とりわけ 2022 年 11 月にプロトタイプとして公開された ChatGPT は、現在世界中の多くの人々に使用されている人工知能チャットボットで、単に日本語を英語に翻訳するだけでなく、こちらで用意した英文をさらにブラッシュアップしたり、トピックだけ与えて、それに関する英文エッセイを作らせたりすることさえ可能となった。従来の日本の英語教育は、機械翻訳の存在に目を逸らし続けてきた観があるが、ここまで進化した機械翻訳をもはや無視できなくなってきたといえるだろう。このような状況下、国内外の研究者や教育者は、第二言語習得 (外国語学習) における機械翻訳の利用可能性に関心を抱くようになってきている。当初は機械翻訳が犯した誤りを指摘し、それを修正することが第二言語習得 (外国語学習) の促進につながるというものが大半だったが (Enkin & Bikandi, 2015; Kliffer, 2005; Nino, 2008 等)、現在は機械翻訳を一つのロールモデルとみなし、そこから学び得るものがあるのではないかという論調に変わりつつある。例えば、佐竹 (2018, 2022) に参加した被験者は機械翻訳が訳した英文を“native-like”と称し、また坂本 (2022) では、機械翻訳の英文を“accurate”や“easy to understand”と形容し、その理由を“DeepL gave me the English sentences I was looking for”としている。

しかし、これらの被験者の声は、実際に機械翻訳を利用した第二言語 (外国語) 教育を受け、それに対する彼らの自覚的な反応に基づいており、したがってそこに何らかの偏見が混じっている可能性もあり、また、機械翻訳を利用している際のリアルタイムの脳へのダイレクトな影響を考察しているわけではない。本研究は、機械翻訳を利用して英語を学習している間の日本人学習者の脳の働きや状態を分析し、それがどのように実際の英語パフォーマンスにつながっているかを検証することで、機械翻訳の使用が日本人英語学習者の認知プロセスに与えるインパクトをより実証的に明らかにすることを目的としている。具体的には、日本人大学生 (CEFR-B1 以上) を統制群と実験群に分け、統制群 (n=5) には日本の伝統的な英語ライティング指導 (まずは自分で日本語を英訳し、それを教師が添削し、返却後それを学習し、再び似た内容の日本語を英訳する) を、実験群 (n=6) には機械翻訳を利用した新しい英語ライティング指導 (日本語を機械翻訳 (Google Translate) を使って英訳し、その後日本語と英文を比較し、どのような英語表現や文法、構文等が使用されているかを学習し、再び似た内容の日本語を英訳する) を受けてもらい、それぞれ下線が施された活動中の被験者の脳内血流量を近赤外線分光法 (NIRS) を用いて測定した。その後、被験者とともに脳内血流量の変化のグラフを確認しながら、そこに特異な現象が認められれば、その時間帯の心的状況等についてインタビューを行った。約 1 か月後、両群ともに再度似た内容の日本語を英訳してもらい、彼らの長期記憶を測定した。研究発表では、本研究の着想を得た経緯、方法、結果、教育的示唆等についてさらに詳細に説明する。

第 2 日 第二会場 12 月 3 日 (日) 10:00-10:40

鷹取 勇希 (東洋大学)

### ハワイ語教育の状況－学習者へのインタビューを中心に－

発表者は、昨年の第 51 回大会に於いて「ハワイ大学マノア校におけるハワイ語教育の現況」という題目のもと、実際にハワイ語の授業がおこなわれている場面においてどのような教育がおこなわれているか、その様子を収めた視覚資料も提示しながらハワイ語による教育の状況を鳥瞰した。本発表では、昨年の発表を基礎としながら、その教育を実際に受けているハワイ語学習者がどのようにハワイ語の教育をとらえているか、発表者がおこなったインタビューデータを参照しながら、そのハワイ語教育の意義を考察するものである。

ハワイでは、1970 年代から現在まで続いている「ハワイアン・ルネサンス」とよばれる活動を契機として、伝統的なハワイ語やハワイのさまざまな文化は復興の兆しをみせている (たとえば, Kanahale, 1979, Warner, 1999, Wong, 1999)。ハワイ語によるイマージョン教育もまたその活動の一部であり、就学前の子どもたちをハワイ語のみで保育する“Pūnana Leo”をはじめ、公立小学校ではすべての教科をハワイ語で教える“Kula Kaiapuni”のプログラムもおこなわれている (松原, 1995, 1999, 2003, 2006, Matsubara, 2000)。

ハワイ語によるイマージョン教育については、上記の松原による研究が先駆的と考えられるが、松原が主に注目しているのはあくまでもハワイ語の教育を施す立場からのものであり、必ずしも実際に学習している学習者の立場からその状況や意義を扱ったものとはなっていない。また、本発表でインタビューの対象としているのは、あくまでも英語を自らの母語とし、日常生活においては主として英語を用いながらも、高等教育のレベルでハワイ語を学習している者であり、インタビュー対象者が実際に受けているハワイ語教育の状況に着目している。本発表の意義はこの点にある。つまり、大学レベルでのハワイ語による教育活動が現在どのような状況にあり、どのようにおこなわれているかということをつまみながら、ハワイ語学習者がどのようにその教育をとらえているかという点をみようというものである。過去の動向から現在の状況を把握することによって、ハワイ語のみならず、英語の影響を受ける多くの少数派言語の教育を通じた存続可能性、延いては少数派文化の存続可能性を検討してみたい。

第 2 日 第二会場 12 月 3 日 (日) 10:45-11:25

金 滋英 (オークランド大学大学院生)  
小山 英二 (学習院大学附属中等科)

### ニュージーランドの学校教育における移民/難民の子供への英語教育

この発表では、ニュージーランドにおける移民の子供たちへの英語教育プログラムを調査し、その効果と受け入れ態勢に焦点を当てる。ニュージーランドは、国連の **quota programme** に則って年間約 1,500 人の難民を受け入れている。日本が 1982 年から 2021 年までの約 40 年間で受け入れた難民は 1,117 人、その他人道上の配慮から在留を認めたのが 5,049 人である (外務省 2023) ことと比較すると、両国の難民受け入れ政策に大きな隔りがあることが指摘できる。

ニュージーランドが、異文化からの移民を社会の一員として受け入れるために行っているのは、言語教育だけではなく、文化の相互理解、メンタルヘルスケアなど、多岐に及ぶ。それらのプログラムの背景、また現場で発生する課題を、文献調査によって、言語教育を軸とした分析を試みる。ニュージーランドの中等教育において英語を母語としない生徒に実施されている **ESOL (English for Speakers of Other Languages)** は、移民・難民生徒の社会的な包摂にも大きな役割を果たしている。コロナ禍以前の先行研究論文には、その英語教育施策のメリットとデメリットに触れたものがあるが、実際に **ESOL** 教育を受けてきた人々の過去 (10 代) と今の現状 (20 代、30 代) を通時的に捉えた時の英語能力の伸びや表現力の広がりといった観点での研究はまだ少ない。また、ニュージーランド政府・教育省が 2008 年から導入した **ELLP (English Language Learning Progressions)** は、生徒の英語能力向上に向けて実践的・包括的な内容を持ち、且つ、教員の教授法の指針にもなっている。現場レベルでの英語教育の現状を把握すべく、移民・難民の語彙力・読解能力に焦点を当ててニュージーランド **ESOL** と **ELLP** の効用と今後の課題点を挙げる。

今発表は、更なる (1) インタビュー調査による質的調査と (2) 日本における移民の子供たちへの日本語教育との比較という研究の前段階の内容となる。

第 2 日 第二会場 12 月 3 日 (日) 11:30-12:10

関田 誠 (東京電機大学)

### 子どもの英語の Wh 疑問表現と倒置 - 階層性を探る

英語で Yes/No 疑問文や Wh 疑問文を作る場合は、助動詞と主語を倒置させる。例えば、Mary can eat rice を疑問文にする場合は、can と Mary を倒置して Can Mary eat rice? とする。Wh 疑問文は what を文頭に置き、さらに倒置を行い What can Mary eat? のようにして文を作る。生成文法では、この倒置を実現するためには文が階層構造を成している必要があるとしている (渡辺 2009)。

関田 (2022) では、Sugisaki (2012) や杉崎 (2014) を発展させ、子どもが発話する英語の倒置を伴う Yes/No 疑問文の適格性が、主語の語数と人称によって変化するかを検証している。例えば、Can she swim? であれば、主語の語数は 1 単語で、人称は 3 人称になる。Can the girl swim? であれば、今度は語数は 2 単語になる。もし子どもの倒置を伴う Yes/No 疑問文が階層構造に基づいていれば、主語の語数や人称によって適格・不適格は左右されないはずであるが、この研究の結果は予測とは異なり、統計的に有意差が出ている。これは従来の主張とは違い、子どもの Yes/No 疑問文が階層構造を成していない可能性と、子どもの言語発達段階に「線形→階層」がある可能性を示唆している。

そこで、本研究では上述の可能性をさらに探るために、Yes/No 疑問と同じように倒置が観察される子どもの英語の Wh 疑問文に注目して、この文における倒置の適格性を調査し、子どもの文が階層構造といえるか議論する。分析項目は関田 (2022) に従い、倒置される要素の種類、主語の語数と主語の人称で、これらの項目によって Wh 疑問文における倒置の適格性が左右されるか検証する。調査する発話は CHILDES コーパス (MacWhinney 2000) から抽出する。